

道立高等学校長庁内公募（中間・**期末**）報告

学校（所属）名	職名	氏名	年齢	公募校長としての着任年月日
北海道帯広三条高等学校	校長	合浦英則	60	令和2年4月1日

1 これまで取り組んできた改革

◇学びの質を変えることで魅力ある高校へ～「学び」の3乗（三条）計画 4.0

保護者・地域・行政と連携・協働し、学びの質を変えることにより学力の向上、進路実現を目指す
《最終目標》

- ・生徒自身が「学びの地図」を描くことのできる探究活動を中心とした教育プログラムの構築
- ・地域とともに人材を育てる都市型モデル構築

(1) 学びの質を変える取組

- ア 単元配列表・ルーブリックによる教育活動のマネジメント
- イ 地域と協働した探究活動の推進

(2) 働き方改革の推進

- ア 担任二人制の実施
- イ シフト制の実施

2 進捗状況及び成果

(1) 学びの質を変える取組（進捗状況75%、ただし探究活動に関しては計画より1年前倒し）

- ア 単元配列表とルーブリックによるマネジメント
 - ・資質能力についてルーブリックを完成させたが（中間報告にて報告済み）、年次でもルーブリックを作成し指導に役立てている。【資料1】
 - ・スクールミッション見直しとともに育てたい資質能力の精選に着手、次年度中に決定予定。
- イ 地域と協働した探究活動の推進（CLASSプロジェクト終了）
 - ・積極的な外部人材活用、特に高大接続をにらみ大学との連携を進め、出張授業等を実施することができた。小樽商科大・帯広大谷短大・室蘭工大の出張授業を実施。また、帯広畜産大に出向いて遺伝子組み換え実験を実施した。【資料2】
 - ・「総合的な探究の時間」での探究活動に1年次、2年次ともに教員養成をねらいとする探究活動を展開した。1年次では北海道教育大釧路校の学生とZOOMを通して交流活動を実施。さらに小中の現職教員を招いての講話、帯広大谷短大教授による幼稚園教育講話を実施。2年次では帯広養護学校に出向いて特別支援教育について学んだ。探究テーマ別のグループに分かれて探究活動を行い、その中で不登校をテーマにしたグループは不登校生徒支援活動に参加し、その結果を地学協働アワード2023で発表、地域未来創造賞を獲得【資料3】。また、他のグループは冬休みに中学生を招いて勉強会を企画、実行するなど地域から学ぶだけでなく、地域に出向いたり地域に働きかける生徒の主体的な動きがでてきている。
 - ・外部人材活用だけではなく、生徒が積極的に外に出て行く機会を公欠として認める体制作りを行った。
 - ・CLASSプロジェクト報告書では、本校の取組に対して「帯広三条高校のチャレンジは、地域の「探究」における、都市部の学習環境をどのように整備していくのかという課題への一つの答えになるかもしれない」との評価をいただいた。【資料4】

ウ 探究活動を通じた進路意識の変容

- ・探究的な学びが即、進路実現につながるものではないが、主体的な進路選択に資するものであることは間違いない。CLASSプロジェクトによる3年間で、探究的な学びを導入し始めた今年度卒業生は、例年と比較すると国立大学総合型入試でも合格者が増加したことは、大学で学ぶ意欲やテーマが明確になった生徒が多くなったことを示すものと思われる。（下表参照）

なお、「学びの質を変えることにより学力の向上、進路実現を目指す」ことが、『学びの三乗プラン』の最終的な到達目標であるが、今年度の卒業生の進路実績は国公立大学合格者数が100名に達し、過去最高であった。

【令和5年度卒業生国公立大学合格者数とその内訳】（準大学を含む）

年 度	全 体	学校推薦型	総合型	備 考
令和元年度	96	13	2	7間口
令和2年度	68	15	1	以降6間口
令和3年度	84	14	1	
令和4年度	80	12	2	
令和5年度	100	23	6	

(2) 働き方改革の推進（進捗状況90%）

ア 超過勤務時間縮減（詳細は【資料5】）

- ・確実に縮減を果たしており、今後も継続して縮減に取り組む。

イ シフト制

- ・後期導入人数 20名（46.0%）
- ・3パターンシフト制が職員に定着。新たに異動してきた12名の取組促進がカギ。
- ・今年度新たに導入した教員の超過勤務時間は前期は大幅に減ったが、後期は小幅にとどまった。11月は入試対応で超過勤務時間が増えたようである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
R4	35.7	48.1	45.7	39.1	19.0	32.6	40.8	31.4	31.2	26.0	22.4
R5	30.7	27.6	28.7	25.9	14.0	27.1	31.2	37.2	28.6	24.8	22.8
差	-5.0	-20.5	-17.0	-13.2	-5.0	-5.5	-9.6	5.8	-2.6	-1.2	0.4

3 課題及び解決に向けた方策

(1) 課題

- ア コンピテンシーベースの教育活動への転換
- イ 個別最適化の学びと協働的な学びの推進
- ウ 持続的な探究プログラムの構築

(2) 解決に向けた方策

- ア 育てたい資質能力の精選
- イ 十勝 ICT サミットを活用した ICT 活用の研究と共有
- ウ コーディネーターの確保と探究活動の校内体制整備
- エ 3年を通した探究プログラムの構築

4 成果と課題を踏まえた今後の取組予定

(1) 学びの質を変えるための取組

- ア 単元配列表・ルーブリック・シラバスによる教育活動のマネジメント
 - ・育てたい資質能力の精選・教科内研修（互見授業）の継続
 - ・シラバスに単元ごとの育てたい力を明記
- イ 地域と協働した探究活動の推進
 - ・専門探究活動（3年次）の実施
 - ・地域コーディネーターの団体会計からの支出による継続

(2) 働き方改革の推進

- ・学校における働き方改革北海道アクション・プラン（第3期）に基づいた改革の実施
- *持続可能なシステム作りをするために教員の主体的な動きを引き出すよう心掛ける

資料 1

単位制16期ルーブリック

3年次	A	B	C		
2年次		A	B	C	
1年次			A	B	C
項目	達成度 5	達成度 4	達成度 3	達成度 2	達成度 1
目指す生徒像	学校生活および学校外において、自身や周囲に必要な事柄を考え、自ら行動し、他者や社会に働きかけることができる	学校生活および学校外において、自身や周囲に必要な事柄を考え、自ら行動することができる	学校生活において、自身や周囲に必要な事柄を考え、自ら行動することができる	学校生活において与えられた事柄について、自主的に取り組むことができる	学校生活において与えられた事柄について、自主的に取り組もうとしている
キャリア・探究	学校外の各種体験を通して、自身の想いを形成し、想いの実現に向けた見通しをもつとともに行動を起こすことができる	学校外の各種体験を通して、自身の想いを形成し、将来の学びや生き方・在り方について見通しを持つことができる	学校外の各種体験を通して、将来の生き方・あり方について見通しを持つことができる	学校内の経験を通して、将来の生き方・あり方について見通しを持つことができる	学校内の経験を通して、将来の生き方・あり方について考えている
学習	設定した学習内容に主体的に取り組み、自己調整（計画→実行→振り返り）をしながら、目標達成に向けて粘り強い取り組みができる	自身に必要な学習内容を設定して主体的に取り組み、振り返った内容をもとに、次の学習内容を設定することができる	自身に必要な学習内容を設定し、主体的に取り組み、その活動を振り返ることができる	自身に必要な学習内容を設定し、主体的に取り組むことができる	自身に必要な学習内容を設定し、指示に従い自主的に取り組むことができる
進路実現	進学先や就職先に対する想いを起点（モチベーション）に、進路実現に向けて粘り強い取り組みができる	自身の学力について客観的に分析し、見通しをもって学習活動に取り組むとともに、進学先や就職先に対する想い（考え）を表現できる	目標とする進学先や就職先に必要な学力と自身の学力について客観的に分析し、見通しをもって学習活動に取り組むことができる	将来の進学先での学びや就職先での業務について具体的にイメージできる	将来の進学先での学びや就職先での業務について考えている
ICT	文書作成・数的処理・発表資料作成の全てについて、他者の視点を考慮しながら独創的で分かりやすい資料を作成できる	文書作成・数的処理・発表資料作成の全てについて、他者の視点を考慮した資料を作成できる	文書作成・数的処理・発表資料作成のいずれかについて、他者の視点を考慮した資料を作成できる	文書作成・数的処理・発表資料作成ができる	文書作成・数的処理・発表資料作成のいずれかができる
人間性	リーダーとして経験をもとに、自身の役割を理解しながら他者に働きかけることで、チームの形成に主体的に関わることができる	他者の気持ちを考慮しながら他と協働して課題を解決することに加え、集団のリーダーとして課題の解決を目指し、集団を統率することができる	相手の言動から意図や気持ちを想像し円滑にコミュニケーションを図ることとともに、他と協働して課題を解決することができる	相手の言動から意図や気持ちを想像し円滑にコミュニケーションを図ることができる	相手の気持ちを想像しながらコミュニケーションを図ることができる

↑卒業までに全員が達成

↑2年次終了までに全員が達成

↑1年次終了までに全員が達成

資料 2

外部人材活用

《協力いただいた主な企業・団体並びに外部人材数》

○1年次

主な企業・団体	
国際理解	帯広コア専門学校・JICA 他
医療福祉	十勝毎日新聞社・がん患者支援の会プレシヤス・NPO ぐらんつ 他
地域振興	十勝あんこ協会・十勝毎日新聞社 他
自然科学	アークコーポレーション・帯広市役所・宮坂建設 他
商業経済	お豆の燻製屋「とん。」・スタジオザンビ・フクハラ・しんかーず 他
食と生活	満寿屋商店・藤森商会 他
芸術表現	帯広市美術振興財団
教育	北海道教育大学釧路校・帯広大谷短大・西小・帯広第二中
スポーツ	全日本ミニバレー協会

37企業・団体 63名

○2年次

主な企業・団体	
アート・表現	POPKE GALLERY・マテックプロダクツ クナウパブリッシング
地域課題解決	北海道庁・小樽商科大・満寿屋商店・帯広市役所・十勝観光協会
教育・スポーツ	帯広養護学校・ちくだい KIP・輪～む・北斗クリニック 他
SCIENCE & TECHNOLOGY	帯広畜産大 室蘭工業大学（1・2年次対象）
看護・医療 & 地域支援	開西病院 他
国際理解・人権	JICA・北海道大学

17企業・団体 21名

北海道地学協働アワード 2023

<Feedback comment sheets>

地域未来創造賞 北海道帯広三条高等学校

☆審査員からのコメント

- ・進学型普通高校の地学協働の在り方として、今後は同様の高校の参考になるのではと感じた。
- ・探究コンソーシアムを基盤に地域との協働体制を構築するなど、テーマに沿った探究活動を展開している。また、地域の大人と一緒に課題を考える取り組みが、地学協働の基礎を築いている。さらにコーディネーターを通して、関係機関と連携を図り、地域の人材を活用した取組である。
- ・探究コンソーシアムが機能しており、本物の知識・本物の評価を進め、探究活動の質が向上していると推測できる。
- ・探究コンソーシアムを中核とした地学協働体制が確立し、学校と地域が課題を共有し解決しながら取組が推進されている。地域を豊かな学習の場として活用する雰囲気があり、今後の教育活動の展開が期待される取組である。
- ・十勝の納涼を応援する歌を作成し、地域 FM 局のテーマソングに採用されるなど、目に見える成果が感じられる。
- ・一連の活動を進める中で生徒の考えにも変化・成長が見られる等、成果が出ていると感じる。
- ・探究テーマとして「不登校」を選択し活動しているところに特徴があると感じた。このテーマはどの世代にも突き刺さるものであり、この取組を通して誰もが意識改革や地域課題を共通認識することができて良いテーマと感じた。
- ・探究推進部を設置し、地域とのつながりを活かした活動を行い、地域と学校をつなぐ窓口として機能している。
- ・CLASS プロジェクトでの実践を活かした多様な探究コンソーシアムが展開され、活動を通して生徒が物事の見方を変えたり深めたりし、自身のキャリアにも活かそうとしている点が素晴らしいです。
- ・学年ごとのカリキュラムが分かりやすい。探究コンソーシアムでは、それぞれのテーマに合わせて、地域のより専門の方々関わっているのもとても良い。地域と学校を繋ぐ窓口はとても大切。
- ・協働の場面が増えていること。地域貢献案を企業に提示し、実現に動いたグループがあることで広がり期待している。
- ・社会課題解決の為に様々な地域の団体の協働し学び合う事は、素晴らしい活動。その中で、学びを通じて物事に主体的に関わる人財育成に取り組まれている事は、今後更に重要に

なる。その中で「不登校」という現代社会の課題に着眼したことは、素晴らしい。今後、その課題にどう向き合い実践を通じで学んでいくかは、本当に大変かと思うが、そんな時こそ多くの経験者と繋がりを持つ事も大切。

- ・探究推進部を設置するとともに、地域の枠を越えた探究コンソーシアムによる地学協働体制を構築し、生徒のキャリア探究をメインとした多彩な活動を展開。
- ・CLASS プロジェクトの実施による成果（教職員や生徒の意識の変容）が感じられる。持続可能な地学協働活動を展開することを期待。
- ・大規模校において難しいとされる探究推進のための校内体制や地域との連携体制を確立している。地域の具体的な変容が見えるとよかった。
- ・地域人材の活動など、地域と連携した活動をとおして、主体的に活動をする生徒が増えてきた点について素晴らしい。
- ・地域との密接な連携体制がとられており、生徒が自身のキャリアを探求する中で、地域を意識したものとなるよう工夫された素晴らしい取組。
- ・地学協働体制が構築された優れた取組。今後、地域とのつながりを深める取組が展開されることを期待。

☆さらなる取組の充実に向けて☆

北海道帯広三条高校では、スクールミッションの達成に向け、6つの探究コンソーシアムを設立し、専門家と連携を図りながら、「協働して解決する学び」について、主体的に実践している内容は、全道の模範となる素晴らしい取組でした。

【協働体制の構築】

- 校内で「探究推進部」を設置し、コンソーシアム機能を確立したことや様々な関係機関と連携を図った取組は、価値のあるものであり、各地に幅広く情報を提供してほしいと思います。
- 地域コーディネーターが、関係機関とどのように連携を図り、どのように協働活動を展開してきたか、もっと知りたくなりました。

【協働体制構築による多様な活動】

- 多様化する地域課題において、地域の大人と一緒に考える取組や企業と協力する取組は、地域学校協働活動の基盤になっていると思います。
- 帯広市長と生徒たちが懇談する活動では、地域とのつながりが重視されたものであり、まちづくりに生かされているものだと感じました。

【協働体制構築の成果】

- 地域課題を的確に捉え、地域と学校が展開している協働活動は、様々な地域人材を活用するとともに、地域とのつながりをより深めた活動になっていると思います。
- 探究コンソーシアムを中心に組織体制が確立されており、様々な課題解決に向けて主体的に取り組んでいる姿について、今後もどのように、地域とコラボした協働活動に発展していくか期待したいところです。

(4) 都市部の進学校におけるキャリア教育の充実にむけた地学協働モデル（帯広三条高校の実践から）

① 高校の状況

帯広三条高校は、帯広市という中核都市に立地しており、周囲のまちから生徒が集まってくる1学年6学級（1学年240名程度）の都市部に位置する進学校である。同様の状況にある高校は多いと思われる。

進学校における地学協働による地域探究の意義については、入試制度の改革として、総合型選抜の拡大が進む中、探究が生徒の資質・能力の育成や具体的な大学等への進路実現につながることで、意義ある活動となってくると考えられる。とはいえ、まだまだ過渡期であり、従来の「入試に資する学力」が求められているため、教職員や保護者、生徒自身にも探究による進路実現への理解が進んでいる状況ではないと思われる。

「変化が激しい時代に社会を創る」という学習指導要領の理念に沿った生徒の資質・能力の育成が進められるためには、進学校でも地学協働による生徒の主体的な探究が重要度を増すと考えられる。実際に帯広三条高校の生徒からも、総合型選抜により小樽商科大学への進路実現を果たした生徒が出てきており、探究により自分の進路を見つめ直すことが進路決定に大きな意味をもつ事例もでてきている。これらの成果は、「探究」を進学校でも進めていく意義を示すことにつながっており、多様な進路実現ができる学校として、高校の魅力化にもつながる事例であると言える。

学校から見た生徒の実態は、「高い学力があるが自主性や主体性が発揮できていない。」というおさえであり、進路についての面接でも自分の進路希望について明確に語れない様子があるなど、進路について主体的に考える場面が少ない状況もあった。

教職員は、進学校であることもあり、受験指導という名の教師主導型授業から脱却していなかったり、「進学に関係のない探究」という意識にとどまっていたりする状況も見られた。

このように、教職員・生徒ともに課題がある状況を解決していくには、「探究」をしっかりと導入し、その成果として生徒の進路実現が見える状況を創っていくことが近道である。学校長の「現状でよし」としない姿勢が都市部の進学校として、大々的に地域探究を取り入れる大きな原動力となっている。

また、帯広市という都市部の高校であることから、生徒は十勝管内の周囲のまちから集まってくる。そのため、地域を「十勝」という捉えで進めているが、前述の他校の事例のように、高校の存続≒地域の存続という状況にはないため、帯広市や帯広市教育委員会が人的・財政的なことも含めて高校の活動に前のめりに協力する状況にはないし、そのことを期待することも難しい状況がある。都市部としては当然ではあるが、こうした状況下にあっても、地学協働による豊かな学びの機会を創り、生徒の資質・能力を育成していくことが学校にとって重要な課題である。

もし、都市部の学校であることにより、地域における体験的な活動や対話が十分に行えないのであれば、むしろ、都市部ではない「地方」の方が学びの質が高くなるという状況も出てくるかもしれない。帯広三条高校のチャレンジは、地域の「探究」における、都市部の学習環境をどのように整備していくのかという課題への一つの答えになるかもしれない。

令和5年度 働き方改革に係る昨年度との比較（教育職）

1 超過勤務時間（平均）

全体	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	total
R4	41.6	49.5	43.6	39.9	25.2	39.4	41.6	36.1	32.0	25.5	24.2	36.2
R5	33.0	36.4	34.4	28.1	18.1	29.9	32.6	31.0	29.2	21.8	23.1	28.9
差	-8.6	-13.1	-9.1	-11.8	-7.1	-9.5	-9.0	-5.1	-2.8	-3.7	-1.1	-7.4

2 超過時間勤務度数分布比較

R5年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	total
46～79時間	13	8	12	5	2	6	16	9	9	2	3	85
80～99時間		4	2	2		1	1	1		1		12
100時間～		2										2

R4年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	total
46～79時間	15	18	19	10	4	13	15	10	7	5	3	116
80～99時間	5	3	4	4	1	4	3	1	1	1		27
100時間～		4	1	1			1					7

R3年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	total
46～79時間	15	17	18	14	14	16	25	15	17	8	9	159
80～99時間	8	8	3	5	2	1	4	5	5	3		44
100時間～	4	3	2	6		1	4	1	1			22

3 分掌再編による勤務時間縮減比較（令和3・4年度に分掌再編）

分掌再編	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
R2			55.1	62.6	37.6	51.3	48.2	36.8	41.8	36.0	27.8
R4	43.2	51.1	45.4	39.9	24.2	40.8	40.2	35.5	32.6	27.7	22.9
R5	31.9	30.1	31.4	27.4	18.4	31.1	33.6	32.2	30.9	20.6	19.6
差	-11.3	-21.0	-13.9	-12.5	-5.8	-9.7	-6.5	-3.3	-1.7	-7.1	-3.4

※R2進路指導部（12名）→R4進路指導部（7名）探究推進部（6名）

R5進路指導部（8名）探究推進部（9名）

4 部活動指導員活用（ソフトボール部・ソフトテニス部）による勤務時間縮減比較

外部人材	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
R3	78.0	84.0	71.5	82.5	62.0	81.5	66.0	61.5	45.5	38.0	31.0
R4	70.0	82.5	58.5	40.0	46.5	66.5	70.5	48.5	40.5	36.0	27.5
R5	41.5	62.5	53.5	40.0	18.5	41.0	36.0	50.5	47.5	28.0	39.0
差	-28.5	-20.0	-5.0	0.0	-28.0	-25.5	-34.5	2.0	7.0	-8.0	11.5

5 今年度新たにシフト制を導入した教員の勤務時間の比較

シフト制	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
R4	35.7	48.1	45.7	39.1	19.0	32.6	40.8	31.4	31.2	26.0	22.4
R5	30.7	27.6	28.7	25.9	14.0	27.1	31.2	37.2	28.6	24.8	22.8
差	-5.0	-20.5	-17.0	-13.2	-5.0	-5.5	-9.6	5.8	-2.6	-1.2	0.4